

国立国語研究所学術情報リポジトリ

Late Adoption of Honorifics : "River Character" Change in the Okazaki Survey of Honorifics

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-10-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 井上, 史雄, INOUE, Fumio メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00000779

敬語の成人後採用

—岡崎敬語調査の「川の字」変化—

Late Adoption of Honorifics

—“River Character” Change in the Okazaki Survey of Honorifics—

井上 史雄 (INOUE Fumio)

1. 岡崎敬語調査の回答文の長さの増加

ここでは、国立国語研究所がこれまで半世紀以上にわたって継続した調査のうち、岡崎敬語に関して成果を報告する。「大規模経年調査プロジェクト」の概要については、本論文最後の節で述べる。岡崎の敬語調査に関してさまざまな現象を分析して意外だったのは、回答文の長さのグラフである。これまで見たことのない年齢パターンが現れた。象形文字の「川」に似た右下がりの線が続くので、「川の字」変化と名付ける。これまで岡崎の「ていただく」や「丁寧さ」の分析を進める際に、反応文の長さが問題になった（井上他 2012）。調査を重ねるとともに長くなるが、若い人は短い。時勢とともに「ていただく」が増え、丁寧さを示す表現が増えたから、回答文が長くなったのだろうか？ 長さは丁寧さそのものと深い関係を持つ。因果関係を知る必要がある。

この稿では岡崎敬語調査の中心部分の反応文全体を扱う。11 個の場面は、道を教えたり、ものを頼んだりするときのことばである（国立国語研究所 1983）。

第 1 次と第 2 次と第 3 回の調査の間には、19 年と 36 年という隔りがあり、第 3 次調査が 2 倍ほど離れている。

第 1 次：1953 年

第 2 次：1972 年 19 年後

第 3 次：2008 年 55 年後

単純な折れ線グラフを作ったときに、線の傾斜角度がそのまま変化の速度や大きさを示すわけではない。3 回の調査間隔を忠実に表して、コーホート分析に向くグラフ作成技法を採用した。調査実施の実年代に忠実に調査間隔と年齢を表現するには、エクセルの散布図にすればいい。または横軸を「時系列」にすればいい。

なお以下の図は『大規模経年調査資料集』のシリーズとして、インターネットで公開している (<http://keinen.info/> 参照)。

作業手順と生年実年代グラフの読み取り方

回答文の長さは、本来はモーラ（拍）で数えるべきであるが、岡崎調査報告書（国立国語研究所 1983）に公開されたデータはカタカナ書きなので文字数をそのまま用いた。拗音（キャ

キュキョなど)の例外はあるが、実際の使用数が少ないので、大きな影響は与えない。長さを測るのに、問題点として複数回答(併用)の処理がある。今回は(繰り返しか言い直しかなどの)内容に関わらず、複数回答を取り込んで(一個の回答として)集計した。数は多くないので、グラフ化して考察する際に大勢に影響を与えることはない。

岡崎敬語調査の分析に有用と判断されたのは、生年実年代グラフである。半世紀以上前から繰り返した3回の調査の被調査者全員を、(エクセルの散布図の技法を使って)生まれた年代によって忠実に並べた。このグラフから読み取れることは実り豊かである。

図1を見よう。グラフの横軸が生年(10年刻み)で、左が昔のお年寄り、右が今の若い人である。縦軸は字数で、上は文が長い人、下は短い人である(下端が15文字であることに注意)。点線は1次、破線は2次、実線は3次調査を表す。第1次調査は調査員の性質によって2種の線で示した。白いプロットがC、黒いプロットがPである(後述)。30代のマークを大きくした。線は、すべてほぼ右下がりである。つまり年長の人ほど字数が多く、10代は少ない。

文の長さの「川の字」変化

ふつう年齢差(見かけの時間 apparent time)から見て若い世代で減る現象は、のちに(実時間 real time)で調査を繰り返せば、使用率が減るはずである。古い方言形や死語・廃語の例だと、調査を繰り返すと、右下がりの線がつながって、減り続ける。1回の調査だけで年齢差を手がかりにしたなら、この右下がりのパターンから、「若い人の答えが短いから、将来短くなるだろう」と予測する。ところが繰り返してみたら、岡崎では実際には短くはならない。調査のたびに前回の右下がりパターンに復帰する。想定外のパターンである。3回の調

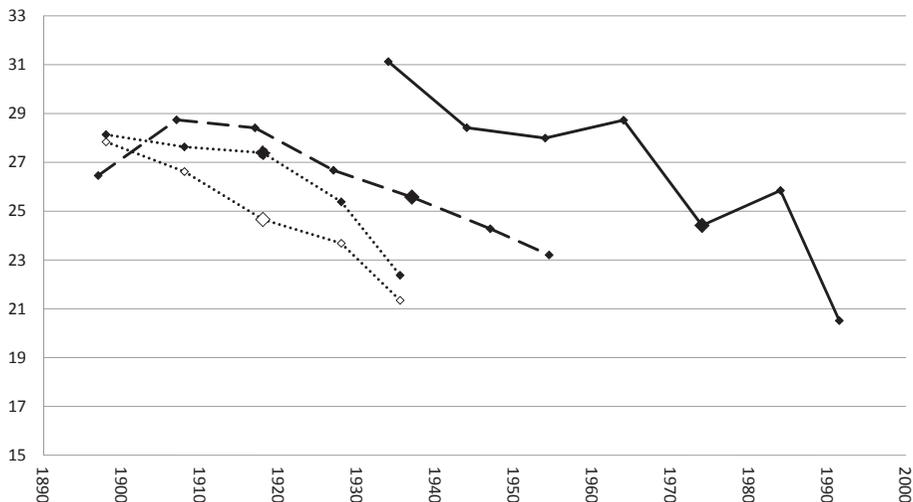


図1 岡崎敬語調査 回答文の長さ(字数)の生年による推移

査を通じて象形文字の「川」に似た右下がりの線が続いたので、「川の字」変化と名付ける。

また 1940 年前後に生まれた世代を見ると、半世紀前の第 1 次調査のときは 10 代で短く答えたのに、第 2 次調査のときに 30 代になって、やや長く答え、第 3 次調査のときには 70 代になり、昔の話者よりも長く答えている。つまり 10 代は手短かに話した。その後壮年になったら昔の壮年と同じくらいの長さで答える。第 3 次調査でお年寄りになったら、昔のお年寄りよりもっと長く話す。若いときは短くてぶっきらぼうでも、年をとると長くなるのだ。ふつうの言語変化と違う。同時出生集団・コーホート cohort の比較で、年をとると字数が多くなるのは、加齢による変化だ。要するに、年寄り話は話がくどい。「年寄りの長話」、「年寄りの繰りごと」は本当らしく見える。

しかしデータの偏りのせいではないだろうか。このグラフでは、3 回の調査の 4 本の線が右下がりパターンを示した。第 1 次岡崎調査のデータは 2 種類から成る。報告書で分析されたのは、「熟練した調査員 6 人」P (Proper だが Professional とも呼べる) のデータで、愛知学芸大学(現愛知教育大学)の男女学生 9 人の対照群 C (Control だが College とも呼べる) のデータは参考にとどめられた。しかしデータとして重要と考え、今回 2 本の線で双方を区別し、同等に扱った。なお第 2 次調査の調査員は、方言研究のフィールドワーク経験者で、特に指示のない限りは「ふだんのことば」を聞きだす態度・技術を身につけた人たちである。

第 1 次調査の P と C の両方を考察対象にしてからは、第 3 次調査まで通しての傾向が見やすくなった。学生調査員が回答を忠実に書きとらなかつたという疑いもあった。しかし今回の結果を見ると、P も C もほぼ同様の結果を記録している。大学の学生相手のときのほうが、くだけた言い方の答えが得られている。文の長さ(字数)も短い。C 学生調査員の結果は、大まかに見て、歴史的推移の一段古い段階を示すことが多い。図 1 はまさにそのとおりで、第 1 次 C、第 1 次 P、第 2 次、第 3 次の順に左下から右上にならんだ。(人数の少ない第 2 次の最高年齢層を除いてだが。)

年をとった人の回答が長いという傾向は第 2 次調査でも分かっていた(国立国語研究所 1983: 38, 99)。しかし当時第 1 次と第 2 次で同じ年齢パターンを繰り返していることを示すグラフは作らなかつたので、重要な現象を読み取れなかつたのだ。

同じ質問への回答(反応文)の長さは客観的に定まるもので、問ごとに違うことがあっても、時代(調査次)による違いは少ないと思われていた。また(ランダムな)個人差が大きいと考えられていた。しかし実際には年齢差が大きく現れた。実証困難と思っていたが、同一の調査法を半世紀隔てて大勢に適用したからこそ、確認できた。さらに実時間と見かけの時間が矛盾する傾向を見せた。つまり、特定の生年の話者グループは、調査の時期が後になり、年齢が高くなるほど長く話す。個人内の言語形成期以降の習得、すなわち成人後習得・成人後採用 late adoption の例と考えることができる。

文の長さとか齢について、類似の現象は知能に関する大規模経年調査 Seattle Longitudinal Study でも観察できたという。老年心理学での知見に新たに論拠を加えることになるだろう。Google Scholar で verbosity, aging などの検索をすると多くの論文がヒットする。ただし多くは知能の衰えとともに的を外れた発言が多くなるという論理である。

右下がりパターンは、山形県鶴岡市の経年調査の音韻共通語化の右上がりパターンと対照的である。ことばが変わるときに、いつも同じ速さで変わるのではなく、速い時期と遅い時期がある。ローマ字のSを斜めに倒したようなグラフを描くので、「S字カーブ」という（井上2000，横山他2007）。鶴岡の音韻とアクセントの項目では4回の調査結果が右上がりきれいに重なってS字カーブを描き、100年ほどにわたって共通語化が完成する過程が示された。言語変化は常にこのパターンをとると思われていた。同じ「大規模経年調査」のプロジェクトの中の音韻・アクセント項目と敬語項目で正反対のカーブが観察されたわけである。

2. 「丁寧さ」の増加

回答文の長さとおっくりの右下がりの線を描くグラフがある。岡崎調査の敬語について第2次調査で適用された技法の「丁寧さの段階付け」を第3次調査にも適用した結果である。回答文全体を3段階（または5段階）に分類したもので、文体として「だ体」「ですます体」「でございます体」に分け、さらに、個々の表現や単語の丁寧さも考慮してある。まさに敬語の中心課題で、第1次、第2次岡崎敬語調査の報告で主題になった。図2に示す。縦軸は、丁寧な答えが上になるように示した。過去の報告書で、丁寧とされる回答を1にし、そうでないものを3にしたので、軸の数値を逆にした。ここでも3回の調査の4本の線は右下がりである。高年層のパターンは、中高と言ってもいい。高年層の人数が少ないせいもあるが、お年寄りには社会活動から遠ざかって、かつ敬老精神を当然と考えて、若い者へ敬語を使わないためとも考えられる。

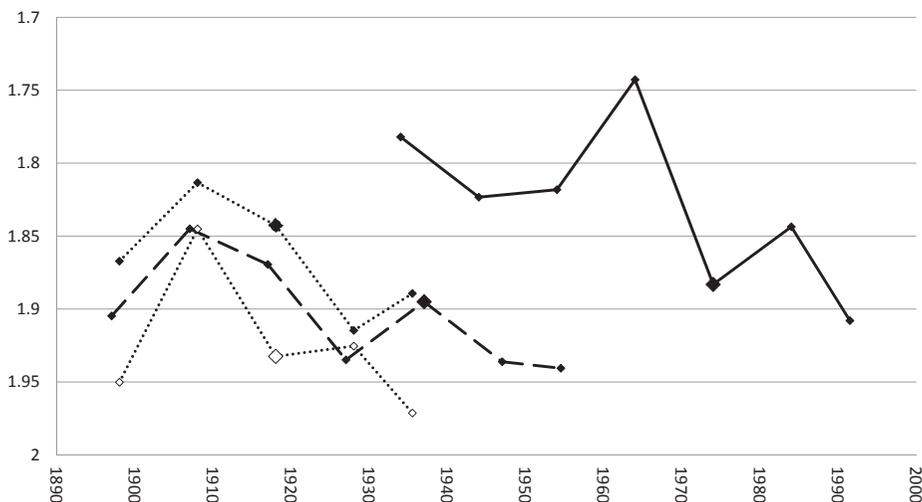


図2 岡崎敬語調査「丁寧さ」の生年による推移

1940年前後に生まれた人たちは、(第1次調査で若い世代として、第2次調査で壮年として、第3次では高年層として)3回対象になったが、半世紀経って際立って丁寧さを増やしている。成人後採用の典型である。後述の「ていただく」をはじめとして敬語現象で成人後採用が目

立ったが、中心課題としての丁寧さでも認められたわけである。これはコーホートの「実時間」による比較に基づく。一方、3回の調査の4本の線すべてで、世代差という「見かけの時間」で、壮年層以上が丁寧で、若年層は乱暴またはぶっきらぼうという傾向が見られる。

これまでの社会言語学の言語変化論では、実時間と見かけの時間が基本的には一致すると扱われてきた。せいぜい「成人後採用 late adoption」がありうるということが議論になっている程度である (Boberg 2004, 井上 2011)。その根拠は音韻や文法に関わる現象だった。敬語を典型とする談話行動では、社会的規範の習得・採用が成人後になることがある。大学生から得られた談話データは、社会人のものと異なる可能性があり、対照研究などでは用心すべきである。また世代差（見かけの時間）をもとに将来の状況を予測するのも、危険でありうる。理論的射程の大きい現象である。過去のことばづかいを思い出してもらい「記憶時間 memory time」という第3の調査技法によって、成人がいつ新しい言語行動を認知し、採用するかを研究すれば、新たな視野が広がるだろう (井上 2014b)。

第1次のPとC、および第2次の3本の曲線は、ほぼ同様のパターンを示すが、丁寧さの程度(図中の上下位置)にはわずかに差がある。第1次ではCよりもPのほうが丁寧である。つまり、調査員が学生の場合よりも、調査員が研究者の場合のほうが、より丁寧な回答が示されたわけである。そして、その両者のほぼ中間に第2次の線が位置する。第1次のPとCの話者数はほぼ同数なので、両者を平均すると、第2次との差がそれほど大きくならない。以下のグラフでも、第1次と第2次の線は、図1ほどにきれいに差が出ない。敬語については、個人の中の使い分けが大きいので、調査結果がぶれるのだろう。第1次(と第2次)の報告書ではPのデータしか扱わなかったので、ここまで読み取れなかったのだ。

3. 「ていただく」の増加

同様の右下がりパターンは、図3「ていただく」でも見られた。詳細は、井上他(2012)を参照されたい。ここには図1、図2と同じ形に書き直したグラフを掲げる。縦軸は11場面全体の「ていただく」平均使用数を示す。3回の(4本の)線のパターンは「川の字」に近い。

第3次調査の年齢の線は凹凸が激しいが、大まかには右下がりであり、若い人はあまり「ていただく」を使わない。1回だけの調査では確言できないが、第1次、第2次の調査結果と比べると、増加は明らかである。また1940年前後に生まれた人は、第1次調査から第2次、第3次にかけて、「ていただく」を多く使うようになっている。

「ていただく」の最近の増加は全国で報告されている。また近代語史からも、方言分布からも明らかである(井上 1999, 2011)。文化庁の世論調査は、毎年報告書が出され、数表がついているので、言語変化に関する項目をグラフにした。その中の「ていただく」は増加を示している(文化庁国語課 2008)。第3次調査の右下がりの線は、敬語行動の成人後採用の典型と読み取るべきである。「ていただく」が敬語論の中で占める位置については、民主化平等化というキーワードのもとで論じた(井上 1999)。

実は図2「丁寧さの段階付け」で右下がりの線が描かれたのは、図3「ていただく」の影

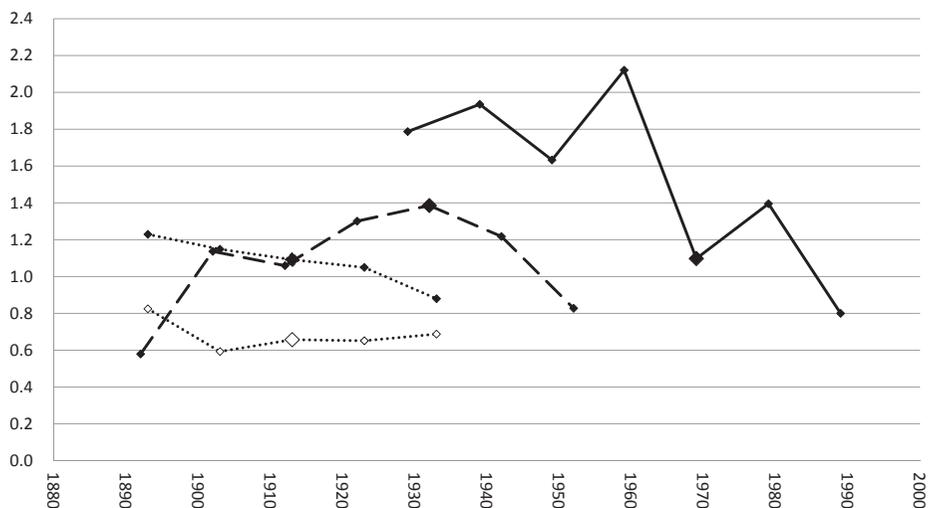


図3 岡崎敬語調査「ていただく」の生年による推移

響である。「てもらう」などよりも、1段階丁寧な値が与えられる仕組みになっているからである。図2と図3が(特に第3次で)似ているのは、この計量手法のせいである。凹凸も似ている。「ていただく」の増加が岡崎敬語調査の結果に大きく影響を与えたと見られる。

なお「丁寧さ」で期待される「ですます体」「でございます体」の使い方を見ると、半世紀の間の変化はわずかである。グラフは省略する(井上2014a『大規模経年調査資料集9』参照)。「ですます体」はやや増加する。「だ体」からと「でございます体」からの移行による。「でございます」そのものはわずかしか使われない。

4. 言い淀み「あの一」の増加

グラフのパターンから言って、第3次調査の右下がりという点で似た様相を見せるのが、広義の敬語に関わる諸現象である。ここでは談話に関わる現象を取り上げよう。「言い淀み」という日常用語を採用した。「言い淀み」は、談話標識の一つで、「(対人) 配慮表現」の1種でもあり、「フィラー filler」「垣根表現、ヘッジ hedge」など、これまでさまざまな用語、現象が指摘されてきた。

ここではその一つ「あの一」に着目する。図4の生年実年代による11場面全体のグラフからは、多くの読み取りができる。録音に基づき忠実に文字化された第3次調査の結果をまず読み取ろう。縦軸は11場面全体の「あの一」の平均使用数である。「あの一」の使用は、壮年以上の世代で多い。相手への配慮だけが使用の原理だとしたら、年をとるほど年下、目下の人が増えるわけだから、言い淀みの「あの一」は減るはずである。もっとも、待遇表現としてではなく、年をとって適切な単語や表現が出なくなったための言い淀みの可能性も大きい。

しかし第1次、2次の年齢差を見ると、わずかな違いだが、むしろ若い世代が「あの一」

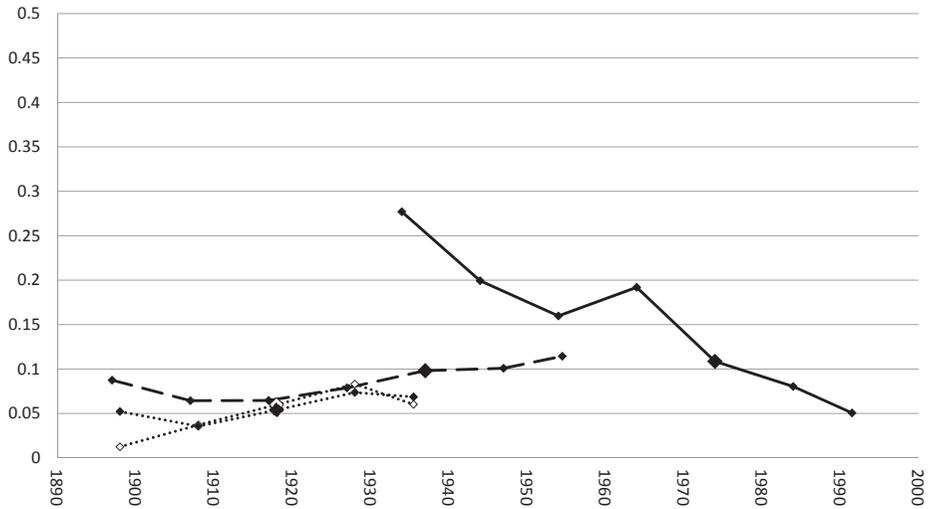


図4 岡崎敬語調査 言い淀み「あのー」の生年による推移

をよく使っていた。人間関係、対人配慮に関わる表現は、戦後増える傾向にあり、はじめは若い人が（自分より年上の人への談話の）必要に応じて使ったが、現在は社会の民主化平等化の進行とともにむしろ高年層がよく使う、と解釈できる。言い淀みとして、他に「すみません」なども3回目の調査で増えている。また今回はデータを提示しなかったが、場面によっては対人配慮表現などが増えている。

5. 「ていただく」と長さとの相互関連

以上、「川の字」の右下がりの線に着目して、岡崎敬語データから得られた4個のグラフを分析した。相互に補強しあう形で、敬語関連現象の成人後採用という一般傾向を示した。以下では、諸現象の理論的関係を論じ、かつ視野の拡大の可能性を探ろう。

近代語史の背景からいって明確なのは(3)「ていただく」の増加である。民主化平等化を表示しうる受益表現の新現象を、成人が採用しているのだ。これは、数値化の基準からいって(2)「丁寧さの段階付け」に直接反映する。「ていただく」は「丁寧さ」と似たパターンを示し、同じ現象の別の面である。また「ていただく」は(1)長さに影響する。「ていただく」を使えば、最低数個のカナの分だけ文が長くなる。さらに(4)「あのー」を使えばカナ3個分は長くなる。以上が論理的因果関係である。このほかにも半世紀経って長さの増大に貢献した現象はあるだろう。そもそも(1)回答(反応文)の長さは、(2)「丁寧さ」と深く関わる。日本語の「丁寧」は、「丁寧な説明」のように、長いというニュアンスも含むし、敬語と長さは、正の相関がある。日本語は膠着語だから、丁寧さを表すのに「敬語添加形式」を多用すれば、当然長さとの相関を示す。

さらに、時が経つにつれて、人々は色々なことをことばで表すようになった。「腹芸」とか「不言実行」「言わなくても分かる」「目は口ほどに物を言い」でなくなりつつある。ただ

しことばづかひの技術・習慣は幼いときに身につくのでなく、成長とともに、周囲の影響を受けて、採用されるものらしい。「敬語をいつ身につけたか」についての文化庁世論調査の結果によると、学校、職場で身につけたとする人が多く、家庭は大きな働きを示さない。敬語は社会人としての成長につれ、熟練労働として身につくのだ。「敬語は教養のバロメーター」というとらえ方は、個人に固定したものととらえているが、成人後も使用能力を伸ばせる。

このような加齢変化は、一度の調査の年齢差から知ることは難しい。年月を隔てた経年調査ではじめて把握できる。国立国語研究所には過去の調査資料という宝物が蓄えてあるのだ。

6. 大規模経年調査プロジェクトの概要

岡崎敬語調査は、「日本語の大規模経年調査に関する総合的研究」の一環として分析されている。これまで1953年、1972年、2008年の3回にわたって調査が行われた。

国立国語研究所では半世紀以上にわたり、山形県鶴岡市、愛知県岡崎市において、共通語・敬語の使用に関する追跡調査（経年調査）・定点調査を行ってきた。同一の調査内容で、同一の対象地域・対象者に対する大規模な調査であり、世界に誇るべき成果である。これにより、話者の生年の幅でいうと百数十年にわたる言語変化を知ることができ、実時間（調査年）と見かけの時間（年齢）の変化や、同一人物の加齢による変化なども知ることができる。ここから得られた共通語化や敬語変化の動向についての知見により、言語変化一般についても有意義な理論的貢献を行うことができる。これらの調査には、未分析のまま保存されている貴重な資料も少なくない。公開して、研究の進展に寄与できる体制を整える。また各地の調査項目には共通項目があるにも関わらず、相互に結果を参照して比較することがなかった。これらの多様な調査を相互に関連づけて、報告書で扱われた以外の観点からの分析を行う。結果は逐次インターネットで公開している (<http://keinen.info/download.html>)。

最終的には、現在進行中の言語変化について、長いタイムスパンの大規模なデータで実証し、新たな理論を生み出すことが目標である。岡崎調査については、敬語や社会言語学的な規則性について、成人後の採用が働くことを実証できた。言語習得と言語使用について、心理言語学的にも社会言語学的にも、射程の大きい研究課題である。鶴岡調査に関しては、音韻の共通語化が話者の生年に大きく支配され、きれいなS字カーブを描くことが実証された。また（統合過程にあたる）共通語化以外に、（分岐過程にあたる）新方言という現象が、いくつかの項目で観察された。鶴岡第4回調査は、2012年春に終了し、その電子化とデータベース化は、着実に進展している。鶴岡調査は統計数理研究所との共同研究プロジェクトであり、学問分野の枠を超えた学際的な連携研究として高く評価されている。

個人の言語レパートリーの拡大の観点からいうと、鶴岡共通語化調査は母語としての方言に加えて共通語を獲得する過程の研究である。岡崎敬語調査は母語としての常体に加えて敬体を獲得する過程の研究である。なお日本語観国際センサスは母語としての日本語以外に外国語を獲得する（または外国語と接触する）過程の研究といえる。他の国立国語研究所大規模調査も、以上のような（方言、敬語、外国語という）3段階の柱に位置付けることができる。

●初校に際しての補遺●

「日本語観国際センサス」は、文部省科学研究費補助金（創成的基礎研究費）による「国際社会における日本語についての総合的研究」の一環として行った国際比較調査。1997～1998年に、日本を含む28の国・地域で、日本語観（イメージ）を各国（地域）の母語観、英語観と対比させながら、とらえた。国際社会における当時と今後の日本語の役割と位置を測定できる。質問項目ごとの「各国（地域）の単純集計結果」、質問項目ごと及び国・地域別の「性・年齢別集計結果」、「職業・学歴別集計結果」は、以下で公開されている。

http://www.ninjal.ac.jp/archives/n_census/result/

●参考文献●

- Boberg, Charles (2004) Real and apparent time in language change: Late adoption of changes in Montreal English. *American Speech* 79(3): 250-269.
- 文化庁国語課(2008)『平成19年度国語に関する世論調査（平成20年3月調査）日本人の国語力と言葉遣い』東京：ぎょうせい。
- 井上史雄(1999)『敬語はこわくない』（講談社現代新書）東京：講談社。
- 井上史雄(2000)『東北方言の変遷』東京：秋山書店。
- 井上史雄(2011)『経済言語学論考—言語・方言・敬語の値打ち—』東京：明治書院。
- 井上史雄(2014a)『岡崎の「ですます」と「ございます」』大規模経年調査資料集9。
<http://keinen.info/download.html#MLLSJ>
- 井上史雄(2014b)「昭和の方言 鶴岡と郊外の言語変化」『日本語学』33(15): 16-24.
- 井上史雄・金順任・松田謙次郎(2012)「岡崎100年間の「ていただく」増加傾向—受惠表現にみる敬語の民主化—」『国立国語研究所論集』4: 1-24.
- 国立国語研究所(1983)『敬語と敬語意識—岡崎における20年前との比較—』東京：三省堂。
- 横山詔一・真田治子(2007)「多変量S字カーブによる言語変化の解析—仮想方言データのシミュレーション」『計量国語学』26(3): 79-93.

《要旨》 国立国語研究所がこれまで半世紀以上にわたって継続した調査のうち、岡崎敬語に関して成果を報告する。調査の回答（反応文）の長さを出発点にする。3回の調査結果のグラフの線がこれまで観察されたことのないパターンを示したので、まずその位置付けについて論じる。そのあと敬語関連現象のグラフに解説を加え、相互の論理的つながりについて考える。これまで岡崎の「ていただく」や「丁寧さ」の分析を進める際に、反応文の長さが問題になった。調査次とともに長くなるが、若い人は短い。時勢とともに「ていただく」が増え、丁寧さを示す表現が増えたから、回答文が長くなったと考えられる。敬語の成人後採用と深い関係が認められる。

Abstract: This paper reports some results from the Okazaki Survey of Honorifics, which is one of the NINJAL investigations that has continued over more than half a century. The length of survey replies (reaction sentences) is the starting point of the discussion. The theoretical background is discussed first, since the graphs from the three survey times show a pattern which has not been observed before. Then, after providing some explanatory comments regarding the

graphs of other honorific-related phenomena, the logical relationships between these phenomena are considered. In previous analyses of the *-te itadaku* form and “politeness” degrees in Okazaki, the length of reaction sentences was an issue. Younger persons give shorter replies, although the average length has increased each time the investigation has been conducted. It seems that the reply sentences have become longer over time because the use of *-te itadaku* and expressions of “politeness” has increased. A close relationship with the late adoption of honorifics is apparent.

井上 史雄 (いのうえ・ふみお)

国立国語研究所時空間変異研究系客員教授。博士（文学）（東京大学）。東京大学文学部助手，北海道大学助教授，東京外国語大学助教授・教授，明海大学教授を経て，2012年4月より現職。現在東京外国語大学・明海大学名誉教授。
 主な著書・論文：『日本語ウォッチング』（岩波新書，1998），『変わる方言 動く標準語』（ちくま新書，2007），『日本語の値段』（大修館書店，2000），『社会方言学論考』（明治書院，2008），『経済言語学論考』（明治書院，2011）。
 受賞：第13回金田一京助博士記念賞（金田一京助博士記念会，1987）。
 社会活動：日本語学会評議員，日本音声学会評議員，国際方言学地理言語学会（SIDG）委員，NHK放送用語委員。

基幹型共同研究プロジェクト「日本語の大規模経年調査に関する総合的研究」 プロジェクトリーダー 井上史雄（国立国語研究所 時空間変異研究系 客員教授）

プロジェクトの概要

国立国語研究所では半世紀以上にわたり，山形県鶴岡市，愛知県岡崎市において，共通語・敬語の使用に関する追跡調査（経年調査）・定点調査を行ってきた。これにより，話者の生年の幅でいうと百数十年にわたる言語変化を知ることができ，実時間（調査年）と見かけの時間（年齢）の変化や，同一人物の加齢による変化なども知ることができる。共通語化や敬語変化の動向についての知見により，言語変化一般についても有意義な理論的貢献を行える。